

魚眼レンズ

「沖繩の土を絵の具に
使ってみよう」と新しい
試みを語る画家の永津禎
三さん。一日から開いて
いる首野湾市宇大山の画
廊「匠」での個展(〜23
日)で、水彩顔料として
沖繩の土を用いた作品を
描いている。

「沖繩の土の色は豊富
だ。赤や黄色など土地に



永津禎三さん

沖繩の土を絵の具に

より特徴がある」とすっ
かり気に入ったよう。土
を顔料にすることは、
陶芸がある。また日本画
家がよく使うことはし
られていたが、洋画では
ほとんどない。「実際に
使ってみると豊かな色
感が期待できる。身近な
自然を利用することで
は、学校でもたちに
教えることも大切では
ないか」と「新発見」を
喜ぶ。

永津さんにとって土
の中間系の色感、表
現とも密接だ。独自のテ
ンペラ画法は、有機物と
無機物がきりきりの形態
で溶融する世界を描いて
いる。主調色は、中間色
である。この色は「純度
の高くない、微妙な発色
がおもしろい」という
「土の色と結びつく」。

永津さんは、

ドイツの現代作
家、とくに表現
主義に深い影響
を受けたよう
だ。「でも、ド
イツの作家は人
体をデフォルメ
しても、どこか
に説明の部分
を残す。美証的な
んでしょう」と

話す。言葉の裏には、日
本のあいまい空間で
本人的あいまい空間で
描きたいとの意図があ
る。「雰囲気包んだ感
算の表現といった日本の
なものが私にもあるし、
むしろいま、このあやふ
やさを大事にしたい」。

今回、初めてのオブジ
ェクトも出品している。土顔
料の利用も、彼自身の発
見の一里塚といえよう。